

## 産業社会における人と動物の関係：沖縄における ブタへの嫌悪と肉への嗜好性

著者	比嘉 理麻
内容記述	筑波大学博士（国際政治経済学）学位論文・平成25年3月25日授与（乙第2639号）
発行年	2013
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/120003">http://hdl.handle.net/2241/120003</a>

氏 名 (本籍)	比 <sup>ひ</sup> 嘉 <sup>が</sup> 理 <sup>り</sup> 麻 <sup>ま</sup> (茨 城 県)
学 位 の 種 類	博 士 (国際政治経済学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 2639 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	産業社会における人と動物の関係 －沖縄におけるブタへの嫌悪と肉への嗜好性－

主	査	筑波大学教授	博士 (文学)	前 川 啓 治
副	査	筑波大学教授	博士 (文学)	関 根 久 雄
副	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	鈴 木 伸 隆
副	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	中 野 泰

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代の沖縄における人とブタ／肉の関係について、ブタへの嫌悪と肉への嗜好性といった相矛盾する態度を問題の所在とし、ブタの生産・流通・消費の全過程における民族誌的事例を示すことによって幅広く考察するものである。

第1章「序論」では、人類学における人と動物の関係論を批判的に検討し、沖縄の人とブタ／肉の関係を捉える理論的視座を提示している。まず、人類学における動物の功利主義的決定論と象徴論の論争を取り上げ、次に象徴論から展開してきた動物人格論を検討している。産業家畜は、大量生産体制に組み込まれていることから、産業家畜と人の関係を分析する際には、功利主義的な視点を考慮せざるを得ない。しかし、沖縄の文脈に即していえば、人とブタのあいだには功利主義に還元できない当該地域の食文化の論理や、空間的な境界をめぐる象徴の論理が介在する。序論では、功利主義的な視点と象徴論的な視点の双方から、沖縄における人とブタの関係にアプローチする必要性を説いている。

第2章「ブタをめぐる相反する運動の発生と展開」では、沖縄の産業化の歴史を辿り、ブタに対する嫌悪と好意といった両義的な態度が、産業社会に固有の矛盾であるとしている。養豚場をめぐる排斥運動から、ブタへの嫌悪がブタの悪臭言説の普及と深く結びついている点を歴史的に明らかにすることによって、ブタに対する嫌悪を実体的なニオイの問題とする支配的な見方を相対化している。ブタは臭いによって、人びとから物理的に遠ざけられたわけではなく、人びとの生活から切り離された結果、ブタは汚く臭いものになったとし、人とブタの物理的な分離という環境の作り替えは、ブタへの嫌悪を助長する悪臭言説が効果をもちうる状況をもたらしたと指摘している。

一方、ブタに対する好意的言説では、現在の豚肉消費とくに特定部位への嗜好は、過去のブタの屠畜儀礼を中心とするブタの自家生産・自家消費の連続線上に位置づけられ、現在の消費慣行と、過去のそれとの連続性が強調されているが、豚肉消費の連続性の言説は、産業化による人とブタの関係性の変化を覆い隠し、分業化の過程を無視し、消費者中心に構成される歴史観に基づいていると言及している。

第3章「養豚場におけるブタへの嫌悪と好意の揺らぎ」では、養豚の専門化と効率化に注目し、ブタの世話のしかたと、人とブタの日常的なかかわりが変化する諸相を叙述している。まず、養豚場の外部者である

地域住民と、養豚場で働く内部者という2つの視点から、養豚場の内・外の空間的な境界が侵犯される出来事を取り上げ、また養豚場の内部者がどのようにブタとのあいだに境界を設けているかを、人のブタとの日常的な接触の有無や程度の相違に注目して記述している。養豚場内部における人とブタの個別的な関わりにおいては、養豚農家は効率化と利益増大のためにブタをモノ化する一方、特定のブタを擬人化することもある。

個々の養豚農家は大量生産を目指し効率化を図るため、ブタを数字によって個体識別し、繁殖に必要な情報のみを收拾し管理する。それによって、ブタは、必要な情報を読み取られるだけの客体となる。この主客の関係構築によってこそ、効率的な多頭飼育が可能になるのである。一方でブタは、人に働きかけ、相互的なコミュニケーションを行なう存在とみなされる場合もある、ブタの扱い方の差異は、個々の人とブタの身体接触の度合いと関連する。概して、養豚場では、外部者の視線を気にする役職にある人物がブタとの接触を最も回避する傾向にある一方、ブタと常時接触する従業員はブタに固有名をつけ、感情移入し、ブタの動作を模倣することさえある。このような固定的な「見る／見られる」関係を超越、人と擬人化されたブタとのあいだで、言語および音声を介した双方向的なコミュニケーションがなされる様相が叙述されている。

第4章「屠殺場におけるブタの脱動物化」では、「脱動物化」という概念をもとに、屠畜場における屠殺・解体の作業を記述し、考察している。屠殺に際して、2回（放電と放血）に分けて殺すことで、そのどちらがブタの死にとって致命傷であったかが不明瞭にされ、人は動物を殺すという感触から免れられる。また、ブタを入念に脱毛することで、屠体の外側を覆う動物性が剥ぎ取られる。ただし、その際、皮、顔、足が「食物」として残され、血も「食物」として流通する点に、沖縄における屠畜の特徴がある。さらに、動物の排泄や生殖にかかわる器官である肛門と性器を切り取り、動物性を消し去ることで、ブタは「食べられる肉」とみなされる。このように屠殺場では、ブタが動物であることを示す部位や諸特徴が除去され、動物性とは無縁な「食べられるきれいな食肉」が創り出されるとしている。

第5章「市場における豚肉への嗜好性」では、屠殺場で脱動物化された豚肉が運び込まれる小売市場の事例から、消費者の豚肉への嗜好性とその嗜好性が、産業化による変化と分かち難く結びついている点を明らかにしている。大腸のみを単独で大量供給できる豚肉流通の変化、すなわち部分肉の登場は、大腸の消費量が拡大する素地をつくりだした。それによって、「ブタを余すところなく食べる」かつての慣行は、自家生産・自家消費の文脈を離れて、「一部分を大量に食べる」部分消費の慣行へと移行したとしている。

こうして現在の市場では、肉の形や切断ラインの異なる他地域の肉が大量に出回り、変化が生じているが、こうした変化にもかかわらず、売り手はさまざまな技巧を洗練させ、地域の民俗分類に合致した肉を創り出す。つまり、流通網の拡大のなかでも、売り手の行為によって、豚肉の民俗分類は表面的には変化せず、自家生産・自家消費の時代から連続しているように映るものとしている。

また、売り手による大腸の加工と売買の事例では、養豚の専門化がもたらした買い手の世代間の顕著な差異が示される。市場（いちば）において、自家消費の経験がある高齢の買い手は、ブタの痕跡が消されたはずの肉の内臓から、ブタのニオイを読み取り、脱臭化を図る。高齢の買い手にとって、生きたブタと結びつく臭いのする大腸は「食肉」ではない。これに対し、生きたブタと肉の結びつきが稀薄な若年の買い手は、痕跡の軽減された肉にブタのニオイを読み取ることはないし、ブタの痕跡に対する関心もない。こうした人と肉とのかかわり方に、ブタと接した経験の有無が如実に反映することが、参与観察によって明らかにされている。

第6章「結論」では、本論で取り上げたブタへの嫌悪と肉への嗜好性という相矛盾する態度の併存状況を、序論で検討した人類学における人と動物の関係論を援用して考察している。ブタの飼育、屠殺、加工、売買という一連の商品化の過程を横断するブタ／肉は、生きたブタの痕跡を消されることで商品としての肉になる。産業化の過程によって、人びとに嫌悪される生体ブタは生産者が働く養豚場へ、そして人びとに好まれ

る豚肉は消費者が集まる市場へと振り分けられる。かつての沖縄における生計財としてのブタの自家生産・自家消費とは異なり、現代では生産の場において人とブタの空間的な境界が維持される一方、消費の場においてその越境がなされる点に言及している。

生体ブタが肉になる決定的な仕組みとして注目した脱動物化は、生体ブタから肉への移行を不可視化する実践でもある。それは、消費者の手に渡る肉から生体ブタの痕跡が消される行為であり、いわば実体のブタと肉を切断する試みといえる。このように養豚場、屠殺場、市場、つまり生産・流通・消費の全フェーズ、さらに言説と環境の変化を含めて捉えることで、沖縄における人とブタの関係、ひいては人と食肉動物の関係性が総体的に捉えられうると結論付けている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

沖縄におけるブタの飼育、屠殺、加工、売買という一連の過程において、それぞれの場所でフィールドワークを行い、生産／消費の全フェーズにおいて、ブタが人とどのように関わっているのかを丹念に描き出した民族誌である。とくに養豚場におけるブタのモノ化と擬人化、屠畜場における脱動物化、市場（いちば）における部分消費、商用分類から民俗分類への翻訳＝読み替え、買い手と売り手の感覚を媒介としたトランザクションにおける世代間の相違といった諸相を的確にとりあげ、各々のフェーズにおける変容を示すことによって、自家生産・自家消費していた時代のサブシスタンスとしてのブタの扱いとの差異を総体的に明らかにしている。

従来、生産／消費のいずれかに特化したアプローチが主であったこの分野において、生産／消費の両過程を扱い、統合を試みた本論文は、その点においてまず評価されよう。また、民族誌の叙述は詳細に展開されており、「綿密な叙述」という言葉に値する民族誌といえる。

一方、こうした綿密な叙述の提示に比べると、理論的な考察の展開は限定的といわざるをえない。たとえば、パプア・ニューギニアにおけるブタとヒトとの関係やアフリカの牛コンプレックスなど、サブシスタンスとしての家畜といった知識を広めることによって、そこから変容した近代的な商業的畜産過程におけるヒトと動物との理解も深まり、意味論的な展開もより深くダイナミックなものとなるであろう。

こうした点は今後課題とされようが、本論文は、従来の生態人類学に意味だけではなく、感覚の重要性を喚起し、また新たな動態的なアプローチを展開している点で、学界に貢献するものと考えられる。

平成 25 年 1 月 18 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（1）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。